

I. ホスピス緩和ケアを支えるボランティア活動

4. がん専門病院でのボランティア

—静岡県立静岡がんセンターの取り組み—

内海 美代子

(静岡県立静岡がんセンター ボランティアコーディネーター)

はじめに

日本一の富士山に抱かれ、自然豊かな田園風景の広がる駿東郡長泉町に静岡県立静岡がんセンター（以下、SCC）が開院して8年の月日が経とうとしています。

SCCの基本理念は「患者さんの視点の重視」であり、患者さんへの約束として以下の3つの理念を掲げています。

- ①がんを上手に治す
- ②患者さんと家族を徹底支援する
- ③成長と進化を継続する

この2つ目の理念である「患者さんと家族を徹底支援する」を具現化するために、ボランティアが活動しています。SCCのボランティアは、プロの生活者として、医療従事者とは違った視点で患者さんの日常性を創り出し、可能な限り不具合

を解消し、「潤い」や「安らぎ」を提供しています。SCCでは、ボランティアを単なる病院のお手伝いという人手不足の解消手段としてではなく、病院職員とは違った立場・視点で患者さん・家族を支援し、社会と疎遠になりがちな病院に、自然の風を運ぶ存在として位置づけられています。今、医療現場で最も不足しているといわれている療養生活の質（QOL）の向上を目指すものです。

SCCでは開院当初から「多職種チームによる医療」を実践していますが、ボランティアも医療チームの一員として位置づけられています（図1）。

病院職員と対等な関係で、パートナーシップを保ちながら協働し、患者さん・家族のケアにあたることで、より手厚い支援が可能となります。その一方で、チームの一員である以上、ボランティア自身の役割と責任に対して高い意識をもつことも求められています。

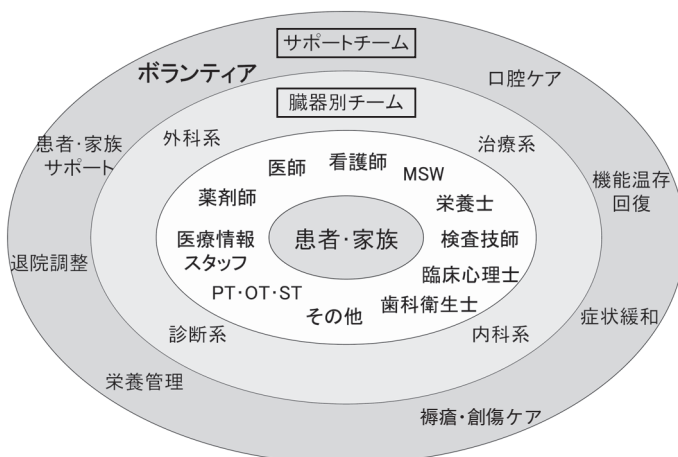


図1 多職種チーム医療の構造

ボランティアせせらぎの概要

SCCのボランティアは、開院準備期間中から協働するチームの一員として職員と共にあゆみを始めました。SCCの理念を実践するボランティアとして活動できるようにトレーニングを積み、病院開院を目の前にした2002年9月2日静岡がんセンターボランティア「せせらぎ」が誕生しました。

せせらぎとは「一滴のしずくから流れが始まり、その流れが絶えることなく人の命と未来を育てているように、自分たちもボランティア活動を続けて生きたい」と言う願いを込めて、ボランティア自らが名づけました。基本精神は、“病気であることを意識せず、1人の人間として患者さんと接すること”です。

現在は、約100名のボランティアが毎週月曜日～金曜日の8:30～17:00の間に、それぞれ週1回ゆったりと活動している。1日の平均活動者数は15名程度で、活動内容によっては夜や土曜日に活動する場合があります。

せせらぎの活動内容は、大きく2つに分けることができます。1つはおもに全員が関わる活動、もう1つは個人の特性を活かした活動です。前者の活動には外来サポート活動（車椅子補助、移動サポート、案内受付の見守りなど）、病室訪問活動（話し相手、散歩、その他患者のニーズから生まれるサポート）が挙げられます。後者の活動には、イベント（クリスマス、コンサート、季節ごとの行事など）、手作り（患者さん向けの帽子・カバー作成、手芸、ちぎり絵など）、図書（巡回図書、ひだまり図書）、環境美化（院内花活け、畑・花壇の整備、ギャラリーの企画など）、ほっとぽつと（緩和ケアのお茶タイム）、フリーサポート（臨機応変に行う活動）を挙げることができます。

せせらぎのグループ運営は、基本的にメンバー全員で行っています。毎月、グループの代表、副代表および有志メンバーで組織している「運営委員会」、加えてメンバー全員が参加する「全体ミーティング」を開催し、グループの総意を形成します。そうして形成したグループの総意をボランティアコーディネーターに伝え、コーディネー

ターが病院と交渉することでボランティア活動に結びつけていきます。

次に、せせらぎの活動について成り立ちから紹介します。

園芸活動

① 経緯

院内に物足りなさを感じたボランティアが野の花を何気なく活けてみました。すると、その花により、やさしく、ほっとする空間が生まれました。このような花の効果を感じたボランティアにより花活け活動と、いけばな用の花を育てる花畑（現在のせせらぎ畑）をつくることが始まりました。

② 目的

花があることで患者さん・ご家族・スタッフの方に少しでも安らいでもらえたらと思っています。一輪の花から会話が始まり、院内を行きかう人々を癒し、ほっとする場を演出することができます。また、花壇に季節の花を植えることにより、季節を感じ心は和まれます。

花壇で育てる花や野菜などは、患者さんやスタッフの要望を聞きながら決定します。園芸を介して生まれる患者さんとのコミュニケーションや触れ合いを大事にしながら、活動することを1番の目的にしています。

③ 具体的な活動内容

季節感を届けるための手入れと管理をしています。病院正面玄関や外来診療カウンターに花を活けています。また、リハビリ花壇（リハビリ室前）、さわやか花壇（4階緩和ケア病棟）、緩和デイルーム花壇、まる花壇、ゆうゆう花壇（個室用）、せせらぎ花畑、玄関前駐車場などで園芸活動を行っています。

④ 課題と展望

園芸活動と聞くと水遣り、花柄摘み、草取りというようにお仕事（業務）となってしまうがちです。しかし、ボランティアに求められていることは、花を介して患者さんやスタッフが、季節を感

じ、ほっとできる場所をつくることなのです。決して仕事（業務）をこなすことではありません。花の手入れに行くと、どこからともなく現れてお話しする人、一緒に草取りしたり、花柄摘みをしたり、そこから広がる話と一緒に泣いたり笑ったり、花を介していろいろな出会いが生まれ、さりげなく寄り添う活動へと広がっていきます。園芸活動は、その花の美しさが人の心を癒すだけにとどまらず、人と人をつなぎ、そこに「潤い」や「安らぎ」をうみ出すのです。

ボランティアが園芸活動を通じて、患者さんがごく日常的な生活や風を感じるにより、患者さんの前向きな感情を引き出すこともできます。今後も園芸活動を通して、安らぎの場をつかっていきたいと思っています。

日常生活を届けるために

ボランティア活動も、慣れてくると傲慢になりがちです。活動が自己目的化してしまうと、患者さんを置き去りにした活動に変わってしまいます。これまでに確立した活動はあくまでも患者さんやご家族の気持ちに沿うための手段であり、それ自体が目的ではありません。人に添うなかでささやかな気づきから活動が生まれ、その活動のなかでさらに1人ひとりに合ったサポートができれば、関わった患者さんの数だけ活動は広がるはずです。活動が目的と違うものにならないためにも、柔軟に学ぶ姿勢をもち、時には立ち止まる、そして何よりコミュニケーションを大切にすることが病院ボランティアには必要です。

挨拶は、コミュニケーションの第一歩です。“温かさ”の提供となり、“癒し”となります。だからこそ、ボランティアはコミュニケーションの大切さを忘れず、穏やかでいつも暖かで微笑みに満ちていることが大切なのです。

せせらぎでは、ボランティア活動の後にコーディネーターがボランティア1人ひとりに声をかけ、一緒になって活動を振り返るなかで、少しずつでも病院におけるボランティア活動とは何かを理解していくとともに、活動を始めた時の気持ちや活動の目的を確認しています。このような時間

はボランティアの励みにもなり、活動が楽しくなり、自然と活動をつくり出す前向きな言葉が誰となく出始めるようになります。そんな声はコーディネーターに拾われ、少しずつ活動に結びついていき、患者さんの元に届いていきます。

現在、行っている活動のすべては、患者さんとの関わりのなかで生まれ、「活動」として確立したものばかりです。

患者さんは自分たちにとって、病院は家庭と思うそうです。行動を起こすとき、家族だけではいい考えが出なくとも他人が入ることによって思いもかけないことが思い浮かぶことがあります。ボランティアの存在もこれです。そして、病院ボランティアは弱い人や可哀想な人のために何か特別なことをするのではなく、病气や立場を超えて、コミュニティーの仲間として存在することに意味があります。「～してあげたい」という気持ちが強ければ、患者さんには負担となります。患者さんに気を遣わせてしまえば、病院は家とはならず、入院生活は日常生活とはなりません。

おわりに

せせらぎは、病院の理念を共に実現する「理念実践型ボランティア」です。これは、病院が目指していることをボランティアも一緒に思い描き、形にしていくということです。そのためには、ボランティア自身が自覚を持って活動することはもちろんのこと、それ以上に、病院側がボランティアを受け入れる目的をはっきりさせ、職員1人ひとりがボランティアに対し理解をすることが、必要不可欠です。

しっかりとしたコーディネートのもと目指す方向が同じであれば、独立したグループとして、ここにしかない活動を展開する世界にひとつのボランティアグループとなる日がいつか来ると信じています。この理想を現実のものとしたとき、SCCは地域に根づいた、開かれた病院になっていることでしょう。それはすなわち、「同じ地域の中で共に支え合い、生きている」ということであり、病院以外のどこであっても最後までその人らしく過ごすことが可能であると思うからです。